特集

がんばれ！北海道

開拓の群像特集

合田 一道

歴史から見えるもの㉘

代議士辞め〝神の国〟造り　武市 安哉

武市安哉（たけち あんさい）という人を知っていますか。代議士の身で北海道の浦臼に入植し〝神の国〟を造ろうと尽力した人です。汚れた政界に絶望し、後に辞職しました。安哉はいまも浦臼町札的内の高台の墓地から、農村の繁栄を静かに見守っています。

武市安哉

安哉は現在の高知県南国市生まれ。明治維新後、教師から戸長、区長、そして郡役所書記になり、自由民権運動に参加しました。自由民権運動とは、人民の自由と権利を主張して、政治に参加を求める運動で、高知出身の板垣退助が中心になっていました。

この時期、薩摩、長州による藩閥政治が横行し、それに対して国会を設置し、国民の声を反映させようという動きが出てきました。明治十二年（一八九二）、高知県の設置と同時に県議になった安哉は、板垣の自由党に入党し、同士らとともに教会で洗礼を受け、行動に移します。ところが政府は急遽、保安条例を発布して民権運動に関わる者たちを逮捕。安哉も獄につながれます。

明治憲法発布による大赦で出獄した安哉は、明治二十五年（一八九二）の総選挙に立候補して当選、人々が疲弊している現実を訴えました。だが政府与党の腐敗ぶりは目に余るものでした。しかもそれを糾弾すべき野党もまた堕落しきっていたのです。

政界に絶望した安哉は、高知植民会を設置して北海道への移住者を募り、浦臼に入植して聖園農場を開きました。誰もが平等である〝神の国〟を建設するのが目的でした。最初に「祈りの家」を建て、一、移住後三年間は酒を飲まない、一、大祭日、日曜日は休む、の二つの約束ごとを決めました。そして安哉は代議士の職を辞し、開墾に全力を傾けたのです。

明治二十七年（一八九四）に第二次移住者が入り、開墾は軌道に乗りました。安哉は日曜礼拝や夜の集いなどで若者たちに「理想郷を造るのだ。やがてここを飛び出して、第二、第三の聖園農場を造るのだ。ここはそんな人たちを育てる学校のようなものだ」と言って励ましました。

この年、明治二十七年秋、安哉は第三次移住者を募集するため故郷の高知へ赴き、北海道の素晴らしさを説きました。安哉の言葉に心を動かした人々が大勢応募しました。安哉は心から喜び帰途につきました。

十二月二日朝、安哉は青森から函館行きの青函連絡船に乗り込みました。ところが船が出港して間もなく気分が悪くなり、倒れ込んでしまったのです。乗組員が駆けつけ救急手当を施しましたが、意識は戻らず、間もなく息を引き取りました。脳溢血でした。まだ、四十八歳の若さでした。

函館に着いた安哉の遺体は、函館の教会に運ばれ、十二月四日、葬儀が催されました。悲報が浦臼にもたらされた日はちょうど日曜日でした。教会に集まっていた人々は「武市先生が亡くなった」と言って泣き崩れました。

遺体は船で室蘭へ、そこから陸路浦臼へ運ばれ、六日、本葬が行われました。若者たちは泣きながら柩を担ぎ、墓地へ運びました。墓標には「われすでに世に勝てり」と書かれていました。ヨハネ伝の一節で、あなたの行為はすでに世を超えたという賛辞です。

安哉が亡くなり、その後を継いだのが坂本龍馬の甥の坂本直寛です。だからこの町には〝安哉の志〟と〝龍馬の息吹〟が伝えられているのです。

武市安哉（前列中央）と若者たち

◆プロフィール◆

昭和九年（一九三四）、空知郡上砂川町生まれ。北海道新聞に入社し、道内各地を回る。在職中からノンフィクション作品を発表。『定山坊行方不明の謎』で北海道ノンフィクション大賞を受賞。退職後は札幌大学文化学部講師。著書は『日本史の現場検証』『人間登場～北の歴史を彩る』『大君の刀』など。